

# 五四時期の 聞一多

聞 黎 明

一九一九年、この年は中国の著名な詩人であり、学者でもあり、民主主義運動の闘士でもあった聞一多の生誕百周年である。また、一時代の区切りともいべき五四運動の八十周年でもある。この二つの記念すべきものが時を同じくするというのは偶然でしかないが、しかし、「五四時期」の聞一多の行爲を通じて、また「五四時期の青年」の思考・情感をよく認識しうるならば、それは意義ある研究だといえるのではないだろうか。

一

一九一九年一月中旬、第一次世界大戦連合諸国がパリ講和会議を開き、これに戦勝国として参加した中国は不平

等上条約により失われていた主権の回復を当然のように主張した。なかでも「二十一カ条の要求」の破棄、山東省における旧ドイツ権益の回収は、中国がもつともその実現を旨指したものであった。しかし、イギリス、フランス、イタリアは一九一七年初頭、日本と秘密裏に合意に達しており、ドイツの山東省における一切の権益を日本が継承することを支持するとすでに承諾していたこと、日本が一九一八年段祺瑞政府と山東問題に関する覚え書きを交わした際に中国側が「贊同」を示したと主張したこと、アメリカが国際連盟への日本不参加の事態をまねくことに懸念を抱くあまり日本の連盟参加のために中国の利益が損なわれることをいとわなかったことなどから、講和会議は最終的に四月三〇日、中国の正当な要求を拒絶した。五月一日早朝、

イギリス外相バルフォアは、イギリス、フランス、アメリカの三か国首脳が参戦国である日本の青島占領を承認し、旧ドイツの山東省での権益の一切を日本へ譲渡することに同意したことを、中国代表に口頭で正式に通知したのである。

このことが中国国内へ伝わるや、にわかに物情騒然、人民は憤った。五月三日、北京大学の自然発生的な集会上、激昂し悲壮感につつまれた青年学生たちは、天安門前で大規模なデモ行進を翌日行なうことを決定する。翌四日、一時代の区切りともいべき五四運動が勃発し、北京大学、北京高等師範学校、中国大学など各種一三校学生三千余名が街頭にうったえ出た。そこでの「主権回復、国賊排除」のスローガンは、反帝国主義と反封建主義を明確に結びつけた最初のものである。デモの隊列は東交民巷で行く先を阻まれ、憤った人々の流れは東城趙家楼へ向かい、パリ講和の調印を主張していた親日派の北洋軍閥安徽派政府交通総長曹汝霖邸に放火、居合わせた駐日公使章宗祥に暴行を加えた。

人々の不満は理解するに難くない。ほどなくして、誰もがウイルソン米大統領が発表した十四カ条の平和原則をほめたたえることをしなくなり、「公理が強権に打ち勝つ」といふとに憧憬をいだかなくなつた。青年学生たちに至つては、戦勝国としてのプライドをもち、パリ講和会議において国

家主権の回復が実現されることを期待していたのはいふまでもない。しかし、この期待は一切裏切られた。その期待と現実の落差は青年たちの心に衝撃をあたえ、にわかに彼らの愛国の激情を呼びおこしたのである。

このことは聞一多にも影響をあたえるものであつた。一九一七年、北洋軍閥安徽派政府がドイツ帝国およびオーストリア・ハンガリー帝国に宣戦、まもなく膠州湾を回復した。青島のドイツ守備軍は武装解除され、その士官級は後に燕京大学となる清華学校西部一帯に拘禁された。このことは聞一多がいた清華学校の学生たちをひどく興奮させ、彼らは続々とドイツ軍が拘禁されている場所にのぞき見に出かけた。ある者はこのことから歴史上中国が被つてきた侮りから少しでもぬけ出すことができるのではないのかと思ふようになり、戦争に参加して国のために尽くそうという考えが生み出された。

よく知られているように、中国の参戦の仕方に関して、日本とアメリカにはそれぞれ思うところがあり、中国は派兵させずただヨーロッパ連合国への物資提供、ヨーロッパ戦線への肉體労働者派遣のみを行なつた。当時、イギリスが北京などでヨーロッパ派遣肉體労働者の通訳を募集したことは、清華学校一九二一年組で学んでいた聞一多やその友人らに、戦争に参加して国のために尽くすきっかけをあたえうるものであつた。呉沢霖の回想によれば、彼らは秘

密裏に通訳選考試験を受験したという。その中の最初のグループが劉沛漳、張邦永で、この二名はなんら問題なく出国している。第二グループの呉沢霖、錢宗堡、方来、葛鼎祥の四名も威海衛でヨーロッパ行きを待つところまで事を進めた。聞一多はそれにつづく第三のグループに入っていたのである。しかし、第二のグループでは事が露見し、学校側は威海衛から呉沢霖らを強制的に連れ戻したので、当然、聞一多は事をおこすには至らず計画を中止した。事後、学校側は劉沛漳、張邦永を除籍処分とし、同時に呉沢霖らは重大な過失を犯したとして記録にとどめ、再犯の場合には厳罰をもって処す姿勢を示した。

同様な計画を企ていた聞一多は処分を免れようと黙っているというのが普通であろう。しかし、彼は沈黙しなかつたばかりか、かえって自信をもって「国を愛することは無罪である!」、一国を愛する権利を剥奪することは許されない!」と呉沢霖らを弁護したのである。彼らとともに学校側と争い、清華学校理事会を動かして学校側に圧力をかけるなどして、最終的には処分の軽減を勝ち取ったのであった。この一件は呉沢霖に深い印象をあたえたようで、彼は次のように述べている。「聞一多の『国を愛する権利を剥奪することは許されない』を、道理正しく厳格な言葉遣いで、力強く調子よく、きわめて鋭い言葉だと、わたしたちは感じていたし、クラスでも広がっていった。後の五四運動での

清華学校の仲間たちによるデモ行進、宣伝活動、軍隊や警察との抗争時、彼らが手にしていた小旗に記された文句、声高に叫ばれたスローガンには、この彼の言葉がまます見受けられた」。

資料上の制約から、その当時の聞一多の欧州行きへの決意がいかにどのものであったのか知るよしもないし、この通訳志願の一件からだけで中国の参戦に対する彼の姿勢を判断することも難しい。ただ、一九一八年一月一日、第一次世界大戦の休戦条約が結ばれ、連合国の勝利を祝賀する雰囲気是北京全域がつかまれているとき、聞一多の意識は勝利をよろこぶ人々とのそれとは異なるものであった。一日、この日、北京一帯の学界教育界関係者ら一万五千人は天安門で祝賀大会を開き、夜には清華学校学生も祝賀のちようちん行列を海淀鎮までつらねた。普通ならば、それらの人々と同じように聞一多も祝賀の興奮にうかされるはずであるのだろうが、実際にはちようちん行列に加わらなかつたばかりか、その夜、内省的な傾向の詩「提灯会」を書いてゐる。

詩中の一節、

奮きまひ格うつこと四載さいを累かさね、

虚ひなしく糜つやす巨万とみの貨。

狂きやう虜ろますます猖獗しやうけつにして、

血肉こころを兇ようの嬖びびと為す。

は、戦争の残忍さを描いている。

歎声 欧陸を震はせ、  
普く天のもと畢く頤を頷かしむ。

共に言ふ 甲兵を銷し、

升平 今茲より始まると。

は、平和への大きな希望を表現している。

豺豸はもと同類なり、

意をおしはかるに齒を残ふこと聳まるかと。

性を失ひて沸として相噬み、

脛を絶ちて肝脾を決る。

は、長期にわたつて戦争を続けたことを譴責している。

田禾 塗炭に灼け、

中に老農の尸を蔵す。

餓鴟喚べども醒めず、

餐に飽けども還ほ兎に嘔ましむ。

は、戦争が中国社会にあたえた大きな損害を訴えている。

だから、彼自身は、

吉金 塵園に鏗けども、

我、聴きて鬩ふ鉤かと思ふ。

華灯 黒樹に耿るけれども、

我、睹るに燦の磷ぐかと疑ふ。

此を思へば肝腑裂け、

天を仰ぎて涙淋漓たり。

なのであり、そして、

いづれのときか当に春雷に効ひて、

高く鳴りて鸞痴を振るはしめん。

と無念の気持ちをうたつたのである。

聞一多の五四運動以前のこれらの思想活動は、個人的な行為ではあるけれども、当時の青年の中にあつてけつしてめざらしくない典型的なものであつた。換言するならば、人々の参戦を通して国家の虚弱な地位を改変しようとする幻想があまりにも濃厚すぎたために、パリ講和会議への過剰な期待が生じてしまつたのであり、この期待があまりにも高かつたためにそれが崩れ去つたとき社会にきわめて強烈な激震を引き起こしたのである。

清華学校が北京郊外に位置していることもあり、清華学校学生たちは五月三日の北大三院の集會と五月四日のデモ行進、前述の趙家楼の焼き討ち、章宗祥暴行などには加わつていない。四日（この日は日曜日であつた）夕刻、用事を済ませに城内に向ひていた学生が戻り、はじめてそれらの事情が清華学校にもたらされたのである。血氣盛んな聞一多はこれに接しても、悲壯な感情を即座にはうたい上げられず、北宋の名将岳飛の愛国の名篇「滿江紅」を借りて抑えがたい憤りを表現したのであつた。

清華学校がわき立つたのは五月五日からである。当時、

清華学校には一級の自治組織がなかったため、高等科、中等科各科長、各組組長及び各種団体のリーダーが愛国運動のすすめ方について協議した。聞一多は新劇社副社長であり、さらに高等科二年組（すなわち一九二一年組）中国語書記、「清華學報」編集などの任務についていたので、この五十七人会議に参加したのである。その会議で彼は臨時書記を任じ、羅隆基とともに議事を記録整理して『清華学生代表団会議記録』をまとめた——これは五四運動期における清華学校についての第一級の歴史資料である。

この資料から、五十七人会議が高等科科長喬万選、中等科科長王國華、高等科三年組組長徐篤恭、高等科二年組組長李鐘美、孔教会会長孔命烜、青年会会長陸梅僧によって開かれたことが知れる。この会議では、暫定の指導機関「清華学生代表団」が組織され、あわせて活動を「対外」と「対内」の二つに分けることが決定された。

その対外活動は、次の六項目である。

- (1) 北京城内の情勢調査のための代表派遣。
- (2) 他校との一致した行動の進行。
- (3) 章、陸両閣僚罷免の国会への要求。
- (4) パリ講和中國代表へ講和条約の調印延期要請を打電。
- (5) パリ講和會議への公平を求める打電。
- (6) 山東・青島問題に関して断乎たる態度をとることを

総統へ要求。

対内活動は、次の五項目である。

- (7) 今晚の学生全体會議の開催。
- (8) 『清華周刊』号外の発行。同誌への風刺漫画の掲載。
- (9) 本校各種出版物に「国恥を忘れるなかれ」などの文句を記すこと。

(10) 日本商品のボイコット。

(11) 大衆にわかりやすい表現と内容の演説とビラの配布。  
この資料からは、さらに次のことが知れる。羅癸祖、陳長桐、羅隆基、孔令煊、陸梅僧ら五名が代表に推されて城内に入り各校との連絡をとり、彼らにつづいて陳復光、何浩若、黃鈺生、潘鐘文、姚永勛ら五名が増援として城内に入っている。同時に、校内に留まっていた学生団は城内での校長會議開催を知り、清華学校校長へ會議への出席を直接請願した。このほか、劉馭万、沈克非を海甸鎮の財界との連絡にあたらせ活動の後ろ盾としている。さらに、大衆にわかりやすい演説を行ない、宣伝ビラをまき、愛国の気持ちを鼓吹した。また、その夜の七時半、体育館前にいて全校学生大会が開かれ、主席陳長桐による四日の北京城内情勢の報告、これをうけてさらに孔令煊、羅癸祖がそれぞれ五日当時の情勢調査を報告、徐篤恭も学生代表団の五日当日の工作情報について報告した。大会後、学生代表団はひきつづき會議をもち、三カ条からなる簡単な規則をとり決め、団長、副団長、書記、會計、幹事などを選出し活

動資金の募り方について協議した。この日、聞一多は多忙をさわめ、夜、彼と潘光旦、段茂瀾、周茲緒は中国語書記に選出されている。活動資金の募り方を協議した際には、彼は新劇社代表として社から学生代表団へ五〇元寄付することに同意し、また当座の資金の立て替えもしている。

五日、北京の中等科以上の学校による学生連合会が成立した。清華学校もその一員となつてゐる。七日、北洋軍閥安徽派政府は逮捕されていた学生を釈放するものの、各校がすでにその挙行を決定していた天安門前での「国恥記念会」を禁止する。この日、北京城内に入ることができない清華学校学生が全体大会を開催し、ここにおいて学校運動の正式な指導機関である清華学生代表団が成立したのだつた。この代表団は先の暫定的な代表団と同様、やはり活動を「対外」と「対内」の二つにわけ、前者は「愛国運動に属するもの」とし、後者は「休講期間中の学校秩序の維持にあたる」ためのものとしてゐる。七日この日、清華学生代表団はさらに組織大綱を採択し、代表の下に秘書部、外務部の二部門を設置することを決定。聞一多は校内工作を担う秘書部の責任ある職務についた。ちなみに、監視部、會計部、事務部、運動推進部、編集部の五部門は後に増設されたものである。

五月九日は「国恥記念日」である。一九一五年のこの日、袁世凱は中国の主権を侵し国を辱める「二十一カ条の要求」

に屈服、この所謂「五九」は中国近代史における最大級の屈辱となつたのである。それから四年後のこの日、清華学生たちは「五四の出来事に激発、その傷の深い痛みを自覚した」、だからこそ全校学生による「国恥記念会」が体育館前で挙行されたのである。

大会は陳長桐の開会の辞にはじまり、喬万選と康德馨の演説、姚永勛による青島の痛ましい歴史についての講演、潘鐘文による「二十一カ条の要求」の朗読とつづいた。大会は、パリの中国代表へ講和条約調印拒否の要求を打電することを決議する。これにつづけて、彼らは国旗に向かつてうやうやしく敬礼し、厳かに宣誓した。「誓いを立てます。この誠意が消えることはないし、誓いの言葉はいつまでも耳に残ることでしょう。中華民國八年五月九日、清華学生は今後、よろこんで自らの生命をなげうち、中華民國人民国土をまもることを、ここに誓います」。

宣誓の後、聞一多は代表団秘書部中国語書記という立場で主席の演壇に立ち、清華学生代表団の組織状況を全校学生へ報告した。この報告自体は事務的な通達でしかなく、さほど重要なものではない。しかし、注意すべきこともある。一つは、これは五四運動の中で、聞一多がはじめて全校大会に姿をあらわしたものであるということ。二つめは、秘書部の中で彼の地位が相対的にかなり重要であつたことを示していることだ。聞一多の報告につづけて、秘書部

英語書記沈克非が、パリ講和会議に出席していた中国特使がパリを出発したという特電を読み上げた。大会終了後、学生たちは運動場に集まり日本商品を焼き捨てた。学生たちが使い古した国産日用品だけでなく、本校購買部が以前より販売していた日本商品をも焼き払ったのである。

## 二

大規模な政治運動というものは古来新たな政治家の揺籃であり、五四運動の多くの学生リーダーは、後に中国政界で活躍する人物となっている。しかし、聞一多はこの潮流の中にあつて「頭角をあらわした」ものの、「けっして表舞台に立つ指導者ではなかった」。梁実秋は次のように述べている。清華の最初の学生リーダーはその年卒業してアメリカに留学しようとしていた陳長桐であり、その次が聞一多と同級の羅隆基である。聞一多については「ひたすらけんめいに電文、宣言を書き、標語をつくっていた。文書に関する活動に没頭していた」。梁実秋が述べるところは実的確で、聞一多の愛国の激情は外面に表現されることはないが、心のうちに深く刻み込まれ、彼の行動中に凝結していることが多かった。このことは、五月一七日付両親宛の長い手紙の中にとりわけ鮮明にあらわれている。この手紙は、当時の一般青年の思想認識を理解する上でたいへん役立つ

と思われるので、次にその一部分を引いてみたい。聞一多は手紙の中で、まず最初に一般的な状況を説明している。

国賊を制裁するとき、そのなかに清華学校は加わっていませんでした。三二人が逮捕される事態となった後に、清華学校は北京の学界教育界の連合会に加わり、逮捕された学生の釈放を要求したのです。この目的が達成された後も、各校の活動は日増しに進展しており、各省団体からの賛同を示す電報が途切れることなく届いています。目下、この運動の勢いと影響力はとても盛んです。しかし傳增湘教育部部長、蔡元培北京大学校長の辞職は大きな痛手となりました。現在、デモ行進や講演が毎日行なわれており、救国をうったえる日刊紙があり、さまざまな運動が積極的に行なわれていますが、規範に外れたもの以外は穩健の二字を旨としております。今回のことでは、北京の二七校は大学を首領格として、すべての運動を厳密かつすみやかに行なっており、とりわけ清華学校のそれは特筆すべきものがあります。

つづけて、怒りもあらわに記している。

国家がこの地点まで落ち込んだことには、神と人ともども怒りましょう。強権あるいは公権なきことに、全国の人々は夢から醒め、あるいは怒りを抑えて沈黙しつづけているようなものでした。売国奴の犯した罪

はこのうえなくよこしまなもので、ほしいままにしてはばかるところなく、人々はその悪行を明らかにわかつてはいるのだけれども、眼を背けてきたのです。ただ学生だけがその悪行にむかっていこうと、起ちあがったのです。それは無駄なことかもしれません。けれども、その心は哀れむべきものですし、その志は称賛すべきものですし、その勇氣は感嘆すべきものです。だからこそ、北京の学界教育界は全国の尊敬をうけているのです。これは当然のことではないでしょうか。清華学校の運動は、秩序、思想をそなえており、今回の卓越した成果は、まさに平素の行ないのたまものです。現在の校内における指導機関である学生代表団は、外務部、運動推進部、秘書部、会計部、事務部、監視部の六部門からなっています。代表団は夏期休暇に入っても学校に残り事にあたることになっています。私と聞亦伝(1)はともに秘書部に属しており、担う責任の重さからとても北京を離れられません。

「北京を離れられません」というのは、つまり帰郷できないということである。この頃、聞一多のもとには、父が彼の休暇中の帰郷を楽しみにしていると、二人の兄聞家驥、聞家驥から相次いで手紙が届いていた。

聞一多の郷里は、湖北省長江下流の沔水県巴江鎮である。巴江鎮は湖北東部の交通の要所ではあったが、武漢から舟

で半日もかかる土地であった。そんな場所にいた父が北京の実状など理解できるわけもなく、息子かわいさから夏期休暇には帰郷するようにと望んだのである。聞一多は、一九一二年冬に清華学校に入学してから、毎年夏期休暇には帰郷しており、その都度一か月余りを彼の地で過ごすので、その書齋を「二月庵」と称し、さらにここで書き記した文章は『二月庵漫記』と題していた。

しかし、このときの父の催促に彼は応じなかった。彼は言っている、このとき家には戻らなかつたけれども、遠く離れていても故郷を思うのが人というもの。だが、「今年は不幸にも国家の大事、責任重大でとても避けることなどできそうになく、仕方がないのだ」と。

つづけて彼は述べている。

私は国のためにはたらいていますが、私だけで国を救うということではありません。毎年、国は巨額の予算を学生の教育に費やしているのです。国家の一大事に際して、学生がやらなければいけない誰がやるというのでしょうか。本来、国への忠義と親孝行は並びたないわけがありません。国への忠義を尽くすことは親孝行を尽くすことでもあるはずですが、今、私は学校にあつて大義をかかれています。この情勢のただ中にあつて、犠牲をはらわずしてどうして愛国を云々できましようか。私は世の中の義理人情に疎く、交際下手、



ただ黙々と読書をしてきました。古の人々の忠義の故事にふれては、そのことに思いを馳せ、かつて自らを呂端にたとえ大事については愚鈍ではないと誇っていましたが、いまこそその大事なのではないでしょうか。ある人は私が大言壮語していると思ひ、「情緒不安」だとか「狂気じみている」だとかといいますが、それはまったく違います。今日、愛国の運動をせず、愛国の発言もしないという風潮があり、愛国のなんたるかがわからなくなっています。少しでも愛国を口にすれば驚かれ、情緒不安だの狂気じみているだのと思われるのは、実に悲しいことではありませんか。日本の中国に対する非道に、私は憤慨し、疲れも知らずに愛国について書きつづけているのです。二〇世紀の若人には二〇世紀の人間にふさわしい思想、つまり愛国の思想があるべきです。

実家への手紙にはありのままの感情があらわれやすく、聞一多は手紙の中で帰郷するのかそれとも学校に残るのか、親孝行を尽くすのかそれとも忠義を尽くすのかをめぐってその率直な気持ちを吐露しており、こういった傾向は五四時期の青年のもつとも突出した時代の特徴であるといえる。二五年後、聞一多は相変わらず次のように述べている。「五四時期に私が影響をうけた思想とは、愛国的、民主的というもので、私たち中国人はどうであろうと団結して国を救

わなければならぬのだと感じたものです」。この言葉は、五四時期の青年の気持ちをよく概括している。

聞一多は清華学生代表団秘書部での活動についてなにも書き残してはいないが、彼が書いた「清華学生代表団 徐君曰哲を祭るの文」には、この時期における彼の活動の一端がうかがいしれる。題名からすると、この祭文は清華学生代表団を代表して著した徐曰哲を弔う文章である。

徐曰哲とは清華学校高等科一年の学生で、五月一六日、清華学校の大衆向け演説団に参加し北京城内で演説したがその途中体調を崩し寝込んでしまい、二二日ついに病魔に命を奪われてしまったのである。徐曰哲は清華学校学生のなかで五四運動にその身を捧げた最初の人となった。聞一多は、祭文で彼の死がもつ意味と愛国運動をやりぬくことを結びつけている。祭文には次のようにある。

列強の人間たちが中国に集まって災いをもたらしている。幾層にも重なった中国の扉を開き、賊を呼び込んでこの国を分割する相談をしているのだ。横暴な行ないに目を伏せ、賊どもは大きな顔をしている。徐曰哲君はこうした上澄みの酒を口にするような行為を悲しんで、六衢を隔てたあの世からしきりに嘆き叫んでいる。徐曰哲君はその身に病ありながら、嫌な顔をせずに行動を起こしてくれた。だがそんな君も、朝出ていつたまま帰ることはなくなってしまった。二本の旗が掲

げられ風にはためいている。まだ君の笑い声が僕の耳に残っているようだ。どうして一夕にして、過去のこなど片づけられようか。山東省での難事が未だにつづいていることを思えば、どうしてこの忠魂が慰められようか。世を正そうとするとき、旧悪こそ滅びるはずではないか。謹んで慰めの言葉を贈り酒を献じようとも、君の魂がそれをうけるかどうか、それはわからない。

この時期、聞一多はイギリスのモース (Hossea B. Morse) の「台湾一月記」を翻訳している。この訳文は長いものではないが、聞一多が五四運動にその身を投じたことについての格好の注釈となっている。訳文は次のように述べている。

一八九四年、清朝政府は日清戦争に敗戦、翌年四月一二日、日中間で下関条約が締結され、清朝政府は台湾および澎湖諸島の割譲を承認した。三国干渉の後、日本軍は南下し台湾接収を準備する。台湾民衆は奮い立ち、台湾民主国が成立、独立を宣言した。しかし、現地に派遣された清朝政府の勅使李晋芳は日本への受け渡し作業をすませると、官吏を引き揚げてしまったのだ。その後、日本政府は軍事行動を開始。台湾民衆は故郷を守るために奮起し抵抗したが、義勇軍各部隊の足並みはそろわず、各々自壊していくかあるいは各個撃破されていった。

この文章の作者は台湾で製茶業を営んでいた商人で、自身が見聞きしてきたことを記録に残そうとしたのである。さらに、この記録がよびおこす感情は、五四の反帝愛国闘争にドキュメントという性質をそなえた参考資料を提供するものであった。そして、このことこそ聞一多がこの文章を翻訳した動機であろう。

「日本軍が台湾を占領する際の戦闘は激しいものではなく、武器を捨て投降した者一千余人、各砲台守備陣地の抵抗は力ないものであった」、総督は高齢の母がいることを理由に台湾を離れることを願ひ出て許された。出発を目前にして、総統は荷物に財貨をひそませているという噂がたち、総統の従者は襲撃され、荷物は荒らされ財貨はことごとくうばわれたのである」といった箇所には清朝政府の腐敗が見て取れる。

「住民は台湾のことが講和会議でとりあげられなかったことを知って怒り恨んだ。朝廷に見捨てられたのだと思ひ、不信任を強めたのだ。彼らは激昂し生命を賭して抵抗することを誓った。官吏たちには、家族を連れて離島してはならない、日頃搾取してきた住民の財貨を島外に持ち出してはならないし、民間の武器を徴用して日本への賄賂としてはならないと通告した」、この箇所には清朝政府に対する台湾人民の憤懣が見て取れる。

「広東からの募兵二千五百人は、武器弾薬を携えて戦場を

台湾に求めてきたのである。彼らは李鴻章が締結した講和条約に不満をもつ人々である」という箇所からは、中国人民が奮い立ち反抗したことを見て取れる。

これから、聞一多が、当時の青年がいだく日本帝国主義への憤慨と中国封建統治体制への不満をモースの文章に託していることが知れる。その愛国主義の気持ちは文面にいきいきとあらわれている。

五四運動の全期間、聞一多は主に校内活動に従事していた。彼自身も「ずっと学校内で文書に関わる活動に就いており、城内での演説会に参加することはなかった。ただ一度の特殊なことをのぞいて<sup>(18)</sup>」。この「特殊なこと」について、聞一多自身ははっきりと語っていない。しかし、王康『聞一多伝』では、この「特殊なこと」を、六月四日、聞一多が百六十余名の学生を率いて入城し、演説や慰問活動をしたことだとしている。

よく知られているように、五月下旬、北洋軍閥安徽派政府はパリ講和での「無条件調印」を平穩無事にすませるために、愛国運動を弾圧する法令を矢継ぎ早に公布した。北京歩兵軍団統領李長泰は鎮圧に功なしと罷免され、「殺戮者」の異名をとる王懷慶がその代行となった。二五日、総統徐世昌は集会、デモ、演説とピラの配布を禁止、違反者は逮捕するとの命令を下す。六月三日、軍隊や警察は街頭演説をする学生の大規模な検挙を行なった。この日、「北京

大学理科校舎、法科校舎に拘束された学生は約千名、その内清華学生は一三〇名ほどであった<sup>(19)</sup>。しかし弾圧がひどくなればなるほど抵抗も激しくなっていた。六月四日、北京の学生は恐れ怯むことなく、街頭での宣伝演説活動を続行する。

王康の著書では、ちょうどこの日、聞一多は学生を率いて北京城内に入ったとしている。同書はさらに、聞一多らは演説宣伝活動をするだけではなく、警察局へ直接抗議をして捕らえられている学生の釈放を要求した。これが拒絶されるや、逮捕されている学生に付き添おうと、すすんで入獄しようとしたが、「彼とその他の代表はすみやかに帰校して運動を指導するようにと求められ、結局その場を離れたのだ<sup>(20)</sup>」。

いまのところ、この王康の説を裏付ける傍証はないが、まったくありえないことではないと思われる。この時期の聞一多のスケッチに、天安門前で演説する青年とそれをとりにまく聴衆を描いたものがある。これは当時の実体験をありのままに写しとったものである。また、王康は聞一多と親戚であり、積極的に民主運動に参加しており双方の関係は密接なものであったから、一般には知られていない事情を知りえたのだと思われる。

結局、この年の夏期休暇、聞一多は帰郷せず学校に留まり運動をつづけた。活動を円滑にすすめるため、校内残留

学生は「清華夏期休暇学生代表団」を組織、聞一多はその一員であった。彼が学校に残ったのは新劇上演の準備にあたるためであったが、思いがけず上海に派遣され全国学生連合大会に参加することになる。

六三運動（上海ゼネスト）の後、全国の運動の中心は上海に移る。六月一六日、上海において全国学生連合会（以下全国学連）成立大会が開催され、つづけて常会が開かれ運動継続の方法についての協議に入った。清華学校学生はこの大会を重視しており、まず羅雅祖を清華学校代表として成立大会に出席させ、つづけて聞一多、羅隆基、錢宗堡、陸梅僧の四名を派遣し実際の運営について研究協議する常会に参加させた。六月二七日付上海『申報』の「京華短簡」によると、聞一多たちは少なくとも六月二六日までには上海に到着している。

上海においても、聞一多の活動はおもに文書に係わるものであった。実家への手紙から、彼が終始学連の『日刊』紙の編集にあたっていたことが知れる。この時、聞一多は歯痛を患い悪化させ、四、五日もなにも食べられず、牛乳でふやかしたパンを流し込んでどうにか飢えをしのぐという有り様であった。七月二四日、運動に賛同する人々の後援をうけて洋行に出発しようとしていた全国学連会長段錫朋の送別会が全国学連によって催されたのだが、その宴席にあっても聞一多は「液状のものを口にするのみ」であ

った。またこの時、上海で学んでいた二番目の兄聞家驄と湖北の実家に帰る約束をしているが、愛国運動を鼓吹する学連の「日刊紙の発行継続」を思いつき、自分には「責任があり、辞めることができない」といって、結局帰郷していない。

全国学連の執行機関は評議会であった。清華代表からは羅隆基、陸梅僧の二名が評議員に選出されている。聞一多は評議員ではなかったたので、日々さまざまな活動をしていったのだが、その名を新聞記事などで目にすることはほとんどない。さいわいなことに、段錫朋送別の日、永安公司屋上で撮影された学生代表の記念写真が伝わっており、これは五四時期の聞一多の姿をいまに残す唯一の写真となっている。記念写真は全部で三枚、康白情、瞿世英、周炳琳、屈武、盛世才らのもの、聞一多、羅隆基、陸梅僧、黃日葵、潘公展らのもの、徐屏南、水楠、呉震寰らのものである。

聞一多は、上海に派遣され全国学連大会に参加することになろうとは思っていなかったし、まして大会で孫文先生本人を目にすることになろうとはまったく思いもしていなかった。八月五日、孫文は全国学連大会閉会式で「今回の学界教育界の活動は、なかなかよいことである」。「だからこそ学生諸君には団結して事にあたってもらい、人民の団結をうながし、国家のためには個人が犠牲になることを知ってもらいたい」と講演している。この講演が聞一多にどう

いった影響をあたえたのか知るよしもないが、二五年後の回想のなかで「上海で孫文先生の講演を聞いた」と殊更とありあげていることは、孫文の講演が彼に残した深い印象を物語っているといえよう。

全国学連大会の期間中、聞一多が『日刊』編集のほかに参加した運動としては、清華諸代表と「統一会所設立案」を共同提出したことがもつとも重要である。単刀直入に言えば、議論ばかりでなにも決められないというのが青年たちに通ずる欠点であり、実際、学連大会は開催期間が長かったわりにはたいした成果をあげていない。聞一多も「開会して以来、上げた成績といえるのはたかだか数枚の電文だけである」、「たいした提案がなされていない」上に、「活動の維持継続」という考え方がまったく欠落してしまっていると考えていた。

そのため、清華諸代表は全国学連のための常設事務所を設けて連絡の便宜をはかり、「日夜寝食を忘れてなにも気にすることなく活動できる」ようにと建議したのである。聞一多は「この提案を実行するためには、資金を集めるのが先決である」が「それはけつして生やさしいことではなく、一般の学生も学業を一時中断して国内を遊説し、募金を呼びかけてこそはじめて実現できるのだ」と考え、さらに自分は建議した清華学生五名の内の一人で「重い責任がある」のだが、「今こそ千載一遇の機会」だからと「二年間の休

学」を計画しその成功を期したのだった。

七月二十九日、清華代表団が提出した「統一会所設立案」が全国学連評議会において採択され、あわせてまず北京、上海に会所を設置することを決定し、来年は天津、四川、福建、湖南に、再来年は安徽、浙江、山西、江西に、その次の年は雲南、南京、吉林、西安、開封に、最終的には広西、蘭州、黒龍江へと拡大させていくことが決定された。こうなると資金集めが問題となる。当時、その年清華学校を卒業した陳長桐、黄鈺生、桂中枢らは、大規模な募金運動展開のためにアメリカ行きを見合わせており、さらに「清華夏期休暇学生代表団」代表呉沢霖がわざわざ上海にやって来ることになっていた。

八月上旬、全国学連大会は閉幕する。まもなく、聞一多、羅隆基らは上海を離れ、常熟での募金活動に向かった。常熟を目的地としたのは、聞一多の級友銭宗堡、呉沢霖、浦薛鳳が皆常熟出身で、そこならば順調な活動ができると考えたからである。常熟における、募金活動の様子についての資料はなにも残っていないが、聞一多の六首の文言詩が彼らがかの地に行つたことを示している。この詩は、その年一月発行の『清華學報』第五卷第一期に直ちに掲載されている。詩の内容は、

半日 車駕に疲れ、  
風塵 頓に僕々たり。

停午 昆山を発し、

船に登ること屋に入るが如し。

という類の具体的な行程の記述をのぞけば、ほとんど遊覧の感想と印象でしかなく、募金活動とは無関係なものである。このことから察するに、常熟では資金集めという目的は達成できなかったようである。

五四時期の聞一多は、当時の青年たちと共通した考え方ももち彼らと一つになつていた。五四運動の意義については当時まだ総括されきつておらず、中国政府がヴェルサイユ条約の調印を拒否すると運動はかえつて一段落をみせたように見え、その様は「竜頭蛇尾」の印象を人々にあたえた。けれども、青年世代への五四運動の深い影響は絶対におおい隠すことはできない。すでに民主と科学は人々共通の見識となつており、もはや封建統治と帝国主義のいいなりになることなど我慢できなくなつていたのである。

このような変化は、聞一多が全国学連大会に出席していた時期に書かれた「夜座して風雨雷電交至り、凜然と此を賦す」にはつきりと見出すことができる。詩には次のようにある。

暗淡たる虞淵に玉虎を追ひ、

飛廉 暫く勤め瀾り來たること遲し。

文書の小閣に孤檠を邀へ、

車馬の長衢に篋を折るを聴く。

天地は仁ならずして李耳を悲しましめ、

風雷に意有りて宣尼を動かさむ。

而して今 十手隆にして畏れなく、

憚々として天の怒るる時を能く忘れんや。

この詩の重点は後半部分にあり、それは次のような意味である。仁義がないいまの世の中は、老子を失つた悲哀を人々に生じさせた。時代の雷鳴はまるで逆境に抗い叫んだ孔子のようである。眼前の人々はなにもおそれることなく売国奴へ怒りをぶつけ、この怒りを永遠に忘れるなど声をあげている。

このような心境は、五四運動に対する当時の青年の一般的な認識であつた。このように青年にとつて五四運動は意義深いものであつたからこそ、二五年後の一九四四年春、国民党政府の「青年節を五月四日から三月二十九日に改める」という発表は、西南連合大学の「教授と学生たちがごぞつて憤慨する」という状況を引き起こしたのである。さらに聞一多が「西南連合大学の風気がこれを以て改まつた」とさえ感じるにいたつたのも、もとはといえばこの年から生じたものはずである。聞一多の「五四運動から私がうけた影響はとても深いものだ」という言葉は、五四時期の青年すべてにあてはまるものというべきである。

### 三

五四運動の具体的な成果は、北洋軍閥安徽派政府のヴェルサイユ講和条約調印に反対する強大な情勢を生み出したことであるが、さらに深い意義をもつ成果は、思想についての空前の大解放がなされたことにあらわれている。この思想解放によつて人々はやいかなる「絶対權威」をも盲信することはなくなり、さらに国家の独立、民族の振興は青年がなすべき責任となつたのである。そして、もともと先覚者たちだけのものではあつた「革新」と「改良」を、青年学生たちが競つて做う氣風が生じたのである。五四運動の洗礼を経験した聞一多も、同じように自覚的に革新精神を現実生活に取り入れたのであつた。

平民教育の興隆は五四運動後出現した社会的状況であるが、聞一多はすでに五四運動時期に試みている。彼と吳沢霖、程紹週、吳宗儒ら数名は、学校の用務員のための夜間学校を催し、彼らは「学校の用務員ほとんど全員を学校用務員夜間学校に入れた」。夜間学校は「五四愛國運動の意義を宣伝する側面、学校用務員の読み書き、文化水準を向上させる側面」があつた。一九四六年、吳沢霖は老学校用務員と話した際、「当時の夜間学校の話になつたとき、聞一多がいかに忍耐強く文字を教えたのかを覚えていた」と語つ

ている。

清華学校周辺には農村があり、五四運動時期、聞一多はその農村の村民図書館の創設に参画している。吳沢霖は次のように述べている。「この時期、聞一多らは通俗的な読み物のできる限り寄付してくれるよう学生たちに呼びかけた。校外の小さな村に一部屋だけのささやかな図書室を設け、村民たちに開放したのである。字を読める者がさほど多くはないにもかかわらずだ。また、集めた金を零細商人に貸し与えるという実験もしている。彼らは「村内の零細商店が回轉資金の融資をうけることができず苦しい経営を強いられていることを理解していた」ので、「集めた五、六〇元を元手にして貸し与える方法を考えたのである。一人一回につき五元までを無利子で借りることができた」。これもちろん「村民たちの歓迎をうけた」。

筆者は、農業科学院副院長となつた程紹週教授をたずねることがある。九〇歳を超えられた程先生は、当時の具体的な事情については覚えられてはいなかつたのだが、聞一多が平民教育にとつても熱心であつたことは記憶されていた。

白話による刊行物が一世を風靡したのは、五四運動の後のことではあるが、しかし『新青年』『新潮』はすでにその三、四年前から白話を提唱していた。聞一多の白話文についての認識には過程がある。一九一九年二月二〇日、彼は厳復の『天演論』を読み、文章は流麗達意、興味が尽きな



い名訳であると感じた。だからこそ『新潮』誌上で嚴復を誇る者が、翻訳によつて深遠な意味を理解したいならば言語を忠実に訳すべきであると述べていることについて、それは必ずしも正しくないと考えたのである。二七日、彼は『清華學報』編集部會議に出席している。その席上、某先生が白話文學の掲載を提案し編集員たちも同調したので、聞一多もやむを得ずそれに従うほかなかつたということがあつた。

聞一多の思想はけつして保守的ではなかつたが、『清華學報』が白話文を採用するに際しては、文言文から白話文へという時流にただやみくもにのるだけのものにはしたくないと彼は考えていたのである。しかし、五四運動の時期、彼が著した「清華學生代表團 徐君曰哲を祭るの文」、翻訳「台灣一月記」、常熟で詠んだ詩は、すべて文言文が用いられている。

聞一多が本當の意味で白話文を受容したのは五四運動の後のことである。今日知られている彼の白話作品のなかでもっとも早い時期のものは、おそらく一九一九年一月一日に書かれた新体詩「雨夜」と「月亮和人」であり、さらにその月の『清華學報』第五卷第一期に掲載された論文「建設的美術」である。その後、彼の白話による創作は止まることなく、一九二〇年春、白話による雪見の詩をつくつたときの、国文教師趙瑞侯による、「君はとても優秀なのだ

から、文言から白話へという時代の潮流にわざわざ迎合する必要はない」という批評には滑稽すら感じるようになっていた。次の講義では、無理矢理に文言文を用いて「点兵行」を訳したのだが、その「序」のなかで「翻訳というのはとても難しいということでは誰でも知つてゐる。韻文での翻訳はさらに難しい。白話でもつて翻訳するなら、おおよそのことは訳すことができるが、文言の翻訳など翻訳の名に値しない」と記している。一九二〇年の夏期休暇になり、聞一多は過去に著した古文詩詞を集め「古瓦集」を編んで文言による創作に区切りをつけ、今後再び文言による創作をしないことを示した。この聞一多の創作における形式上の変化は、外部要因としては時勢の影響であり、内部要因としてはあえて過去を否定するという進歩追求の精神である。

社会の改良というものはそう易々とすすむものではない。聞一多は大言壮語することなく地道に努力した。そして、それは彼の身辺のささやかな改革にあらわれている。一九二〇年三月、聞一多、吳沢霖、潘光旦、聞亦伝は小さな団体を起こした。この団体の目的は、ただ読書交流と時事問題を論じようとするだけのもので、当初なにも名前がなかつたのだが、後に他団体との接触の都合のために、ちょうど劉聰強、孔繁祁兩名が加わつた際、団体の名称を「上社」としたのだつた。



この「上」という字は特別なもので、二つの意味がある。一つ目は、「上」は古代の「上」の字であり、常に上昇していこうという意味が込められている。二つ目は、その時の構成員が六名であり、「上」の字はちょうど「六」を意味したのだ<sup>(4)</sup>。

上社同人は少人数の毎日顔を合わせる仲間内のもので、ことさら役職を決める必要などなく、代わる代わるの記録を担当し、記録する者がそのまま臨時の主席となった。上社は毎週土曜の午後に二時間ほどの集まりをもち、冒頭の報告と討論がそれぞれ一時間ずつであった。はじめの三か月間は、毎回三人が読書報告をし、他の三人が討論の準備をする、ちょうど二週間に一回順番が回ってくるようになっていた。

読書と討論が上社の活動の主なものであった。これには、五四運動後、一部の青年たちがすでに表面的な大規模な活動に満足しなくなっており、理性的な転換をはじめていた——社会問題の方向への転換——ということが反映されている。このことには、新しい理論によって思想の発展を充実させていくことを渴望する時代の潮流があらわれている。上社の読書報告のやり方は、各人が重要と思われる箇所を書き出してそれを編むというものであった。はじめ、一冊の本について多くの報告がなされていたものが、回を経るごとに様々な本が取り上げられるようになっていった。

討論については、当初は全くの失敗であった。準備不足のために的をえた発言がすくなく、二、三回会を重ねてもいかなる結果も出すことができなかったのである。後に、彼らはやり方を改善し、毎回論題と進行役を決め、討論に際してあらかじめ準備しておいた論題の概要を発表させ、それにもとづいて各人が意見を発表するようにした。この方法は以前のそれとくらべるとあきらかな進歩であった。

上社社員は自身の活動記録を重視しており、すべての読書報告と討論には同じ原稿用紙が用いられた。最初の三か月間での十回の定例会だけで、積み重ねられた記録は実に百五十余枚に達している。この成果を分類整理した結果は、読書報告では歴史関係が二篇、娼妓関係が二篇、美学関係が三篇、経済関係が二篇、文学関係が五篇、哲学関係が一篇、農業関係が一篇である。討論では、姓氏呼称関係が二篇、校内問題関係が二篇、服飾関係が一篇、中国目錄法関係が一篇である。惜しむらくは、これらの資料が散逸してしまったことだが、さいわいなことに『清華周刊』には若干の手がかりが残されており、少なくとも一九二〇年における彼らの活動の一端はみることができよう。

四月一九日。報告テーマ「中国古代娼妓史」、「メートルリンクの演劇」、「ヨーロッパにおける戦争の原因」。討論テーマ「いかにして清華学生を救済するのか」。

四月二五日。報告テーマ「美の教育」、「経済思想の歴史」、

「モースの学説」。討論テーマ「呼称問題」、「姓氏問題」、「服飾制度問題」。

夏期休暇中。往復書簡による討論「本社がすすめている文章表記、倫理主義とキリスト教等々」。

夏期休暇後。家族制度の改革と児童教育問題についての討論。

一〇月二三日。発表「信仰と信仰のあるべき姿」、「ロシア研究」。

二月二一日。発表「植物の分類」、「宗教のセクト」、「國際条約考略」。

以上の活動内容をみるに、彼らが関心を抱いていた問題は一般学生の視野を超えており、その思考は国家の進歩、民族の復興と密接に関係していたことが知れる。ただ、それら机上の空論では彼ら青年が抱く志は表現できなかつたので、こういった状況の中、清華学校校内に大きな風波がまきおこつたのであつた。

この風波が起こつた原因について、潘光旦は次のように回想している。何名かの河南出の学生たちが、城内から『黒手盗』(The Hooded Terror)の類の映画フィルムを持ち帰り、週に一度上映していた。これらの映画はスパイものではなく盗賊もので、刺激と誘惑に満ちており、アメリカ人教師の子どもが映画をまねて窃盗を犯すほどであつた。そこで、「聞」多先生も含めた私たち世話好きの小さな団体は、口出

しをせずにはいられなくなつた。私たちは『清華周刊』とその他の方法を用いて、一方では教育的意義をもたない映画は上演してはならないと主張し、もう一方では学生にはたらしかけて色情や犯罪をおおる今で云うところの煽情的な映画を規制し、この学生商人たちに映画の質を今までとは違ふ路線に転換せざるをえなくさせようとしたのである」。

潘光旦が述べている「世話好きの小さな団体」とは、すなわち「社」である。そして「口出し」した時期は、一九二〇年夏期休暇後のことである。一九二〇年一〇月二三日、「社」は新年度に入って四回目の定例会で、計画されていた読書報告をしばらく中止し、映画問題の研究に集中することを決めている。突っ込んだ討論をするために、彼らは十分な準備をし、問題を以下にあげる一三項目に分けた。

「清華学校の映画」、「中国の映画」、「欧米の映画」、「教育における映画」、「芸術における映画」、「映画と道徳および映画審査」、「映画と衛生」、「科学における映画」、「宣伝事業と映画」、「産業における映画および映画産業」、「映画の歴史」、「清華学校における映画の影響力」、「清華学校における映画の改善計画」。最後の二項目以外、一人二項目ずつ担当し、あるいは新聞書籍を参考に、あるいは実地調査をして、毎週の定例会で報告を行つたのである」。

一月一二日、先頭を切つて聞「多」の「黄紙条告」が「清

『華周刊』に發表され、これが上社の映画への宣戰第一砲となった。このなかで、聞一多はスケッチのような手法を用いて、色情や犯罪をおおる類の映画に刺激される人間の心理状態を巧みに描写風刺し、そのうえで嘲りの口調でもって寸評と批判をくわえる。その文章は辛辣で、それゆえ「聞一多君の一篇に、大筋において私は同意する」と肯定されると同時に、その文章の「辛辣、冷酷」な部分については「賛同できない」といわれたのだった。

もし聞一多の「黄紙条告」をただ相手を嘲り風刺するだけのものとするのなら、一二月一〇日に發表された「映画は芸術か否か」は、映画を芸術的角度から研究批判したものであるといえる。文中、聞一多はまず研究目的が何であるのか問いかける。「私たちの研究は映画が芸術か否かをあきらかにすることを目的としている。つまり、映画が供給するところの一種の快樂が、真実なのか虚偽なのか、永久なのか暫定的なものなのかを知ろうとするのである」。つづけて、彼は映画を「機械的基礎」「營業的目的」「非芸術的組織」という三つの側面から分析し、また先の自らの問いに答えている。その主眼は、映画が芸術的なものになりうる可能性を排除しようとするものであった。その理由について彼は次のように述べている。

映画は機械をその基礎としている以上、機械の管理からは永遠に逃れられない。そうであるから映画の脚本、演技、

セットもすべて機械に従属している。アメリカ全国映画營業人会長ブラディー (William A. Brady) が「映画の改良は撮影機材の進歩によつてのみ可能なことで、劇作家や演出家には期待できない」と正式に宣言していることからも、「芸術と機械は水と油のようなもので、性質がまったく異なり一致しない」ことが知れる。映画は「すでに機械の奴隷となつてゐる」のであり「芸術の世界に帰属させ難い」。その上、映画の目的は營業であり、「營業側には利益を求め、欲望があるのみで、そこにはいかなる理想もない」、「社会にとつて有益なのか有害なのかということは、彼らが関知するところではない」。映画のなかでの列車の脱線、オートバイの衝突事故、馬が水の中に突つ込んでいく、うら若き婦人の醜態などといったカットは、すべて金を騙し取る手段にほかならず、「芸術がもし売りに買いできうるものになるのなら」、「その価値はまったくなくなつてしまふ」。さらに、映画の構造、演出、セットなどは写實的すぎ、客観性がゆきすぎ、大げさな距離・速度表現、うまく言葉では表現しえないということも、映画を芸術に帰属させてはならないものであるということを証明している。

もちろん、聞一多も映画の「教育的側面」を認めてはいたが、このように考えていた以上、それは「教育の範囲内で發展」すべきであると考えていた。この時の聞一多の映画批判は、あきらかに功名心を帯びたものであり、その分

析は牽強附会の誇りをまぬがれない。しかし、この欠陥に目をつぶり、聞一多が論難した精神を汚す映画の不健康さを認識するなら、この文を著した聞一多の動機の正しさはたやすく肯定できよう。

これと同時に、「上社」同人の文章も相次いで発表された。

劉聡強「映画の由来」、「清華学校の映画の過去と現在」、孔繁祁「映画事業」、「映画と宣伝」、聞亦伝「世界各国の映画状況」、潘光旦「映画と道徳」、「映画と視覚」、「清華学校の映画と今後の娯楽」、吳沢霖「映画と教育」などである。こうして清華学校内では映画規制の風潮がわき起こったのである。この様子がある人は次のように述べている。

聞一多が著した「黄紙条告」が旗振り役となって、校内では映画問題についての意見が発表された。文章形式のものあり、スローガン形式のものあり、その意見の多さは枚挙にいとまがなかった。そして、さらに加熱してゆき異常な騒ぎとなつてしまった。<sup>⑤</sup>この「異常な騒ぎ」とは聞一多らと異なつた意見について触れた言葉で、実際、清華学生は映画を規制すべきかどうかについて聞一多らとは異なる認識も存在したのである。

「清華周刊」には清華学校で上演する映画を選択していた董大西の弁明と解釈である「映画問題」のほか、李迪俊「映画と上社」、滌鏡「映画存廃問題」、丁濟祥「映画問題についての不満」、介父「上社解話」などといった映画上映を支持

する文章も掲載されているし、さらに聞一多らを「偽善者」「清教徒」と誹る者もいた。

この論争はついに学校の注意をうけることになり、一九二一年一月中旬、校長金邦正は聞一多ら「上社」同人と会見、その経緯の説明をうけて対策を協議した。この後、学校内での映画上映の方針は変化する。以前の方法といえはただ慣例にしたがうだけであつたのだが、方針変化後は「一、上映減少、二、映画以外のものに代える、三、上映方法、上映作品選択の改良」がなされた。<sup>⑥</sup>校長は懇懇に「よい映画がないときは、上映してはならない」と表明、さらに「以後、大規模な委員会を組織して娯楽行事を専管させ、よい映画があつたときにのみ上演できることにする」とした。このような結果は理想的なものである。だからこそ潘光旦は上社が起こしたこの「ささやかな運動は成功したといえる」と考えたのである。<sup>⑦</sup>

この映画に対する研究と批判は、聞一多らにとつてささやかな試みでしかない。当時、彼ら世代の青年たちは多くの問題に直面し思考していた。それは、どのように時代の流れに順応していくのか、どのように社会改革をすすめていくのかということである。新文化運動では、さまざまな復興救国を目指す考えがもてはやされたが、その中で聞一多が選択し、最後の視線を投げかけたのが蔡元培の「美育を宗教に代える説」である。

聞一多の美育追求についてのべるならば、彼自身の美術活動に触れざるをえない。聞一多は幼少の頃より絵画に親しみ、清華学校入学後は西洋美術にも触れている。美術教師ストール女史の指導と励ましのもと、その技能は目覚ましい上達をみせた。一九一七年、聞一多は高等科に進級する。その教育課程には美術が設置されていなかったのだが、ストール女史が催す課外活動によって彼は美術をつづけたのであった。

一九一九年九月、ストール女史支持のもと、聞一多、楊廷宝<sup>(5)</sup>、吳沢霖、方来らは「美術社」と称する組織を起こした。彼らは、一方で織物、磁器の絵柄、彫刻、絵画、美術史や芸術家の伝記などの書籍を読みながら、また一方では鉛筆、ペン、油彩、木炭等各種描法をも練習し、月に一度は報告会や展覧会を行なった。一九二〇年夏期休暇後、美術社同人は五十余名にまで増加し、そのレベルも相当なものとなっていた。「ある著名な芸術家がこの数年の彼らの作品を觀て、国内の普通の学校にはとてもみることができない優秀なもので、美術専門の学校でも彼らと肩を並べるのは難しい、と言っている」。

美術社結成時、社は絵画の修練と研究の二項目を活動の趣旨とした。一九二〇年夏期休暇後にはさらに「宣伝」の一項が加わる。研究と宣伝の面で、美術社同人がどのような活動をしたのかはわからないが、聞一多の「建設的美術」、

「芸術を専門とする人々の叫び声を募る」などには、彼自身の美術に対する巨視的な認識が反映されている。

聞一多の認識では、「美術」とは、けっしてたんなる芸術の外部形式の一つではなく森羅万象大自然を包括したものである。人類などは、この大自然の中の小さな存在でしかない。聞一多は次のように述べている。「世界とは、本来、天然に出来上がった美術館である。人類はこの美術館の中に住み着いて天然の美術品を日々模倣し、そうして天地万物を創造した力と妍を競っているのだ。人類が為したすべて、例えば文字、音楽、演劇、彫刻、図画、建築、工芸はすべて美感の結晶である。あえて言う必要もないが、政治、産業、教育、宗教などもすべてながしかの美術的意味を含んでいるのである」。こうであるから「世界文明の進歩と美術の進歩」は「比例する」のである。聞一多は「美術」の概念を説明した後、さらに「美術」の内容について以下のような分析を行なっている。

文明は思想的なものと物質的なものの二つに分けられる。美術も二つに分けられ、具体的美術と抽象的美術がある。抽象的美術が思想的な文明に影響をあたえ、具体的美術が物質的な文明に影響をあたえる。私たちの中国では、これまで抽象的美術が重視されてきており、だから中国は東方旧文化の代表となっている。具体的美術については、唱えられないばかりか、無残に

も踏みにじられてきた。それゆえ、私たちの工芸は腐敗の極致に達してしまつたのである。

ヨーロッパの大戦は終わった。地球は腐り朽ちた殻を脱ぎ捨てたのだ。以前は夢に見ることすらできなかつた希望が、今や訪れようとしている。その中の一つである卑俗な生活を改めようとする運動は、徐々に芽ばえはじめてゐる。欧米各国の人々はさかんに自国の美術 (National Art) を鼓吹している。どんな国家であっても、現在この二〇世紀という時代——科学が進歩し、美術が発達する時代にあつては、美術觀念のない卑俗な生活に甘んじてはならず、人間である以上美術的觀念をかならずそなえているはずだと彼らは言つてゐるのである。美術を提供することは、すなわち人格を尊重することである。このようにみても、世界の潮流からいつて、私たち中国におけるこれまでの頑迷で筋が通らない美術輕視の思想は、打破しなければならぬものとなつてゐる。まして中国国内の状況をみるに、中国の腐敗した工芸、腐敗した教育のような美術を重視しないものは救いようがない。現在、中国の腐敗した工芸と教育をどのように救うのか、どうして彼らを救わねばならないのかということと述べてみると、美術とは空虚なものであつてはならず、適切で建設的なものでなくてはならないからである。

「建設的美術」の一年後に発表された「芸術を専門とする人々の叫び声を募る」の中で、聞一多は美術を含めた芸術作用について、さらに明確にまとめてゐる。

人類はこれまで物質的文明に依存してきた。その結果が、空前の血みどろの戦いである。人類は大いに失望し、科学に頼り切ることはできないことを知り、現在、芸術に傾倒しその保護を頼りにしようとしてゐる。中国は直接戦争の惨事にさらされたわけではないのだけれども、しかし人々の生活の無味乾燥さ、精神の墮落の有り様は、ヨーロッパにくらべてもいっそう甚だしいものがある。だからこそ、私たちが必要とするのは、当然のごとく芸術なのである。

聞一多の論述と蔡元培の「育徳学校における演説の意図」、「美術と科学の關係」、「学校は學術研究のために設置されてゐるのである」、「美育を宗教に代えるの說」、「文化運動は美育を忘れてはならない」などの文章と比較するならば、彼が蔡元培が提唱した「美育を宗教に代えるの說」の影響をうけていることが容易にみてとれよう。美育と国民性の改造の關係をさらに研究するために、一九二〇年末、聞一多、浦薛鳳、梁思成は、有形芸術研究を旨とする団体「ミューズ」を結成した。二月一日、ミューズは同人一四名による集会上、楊廷宝、方來、梁思成、浦薛鳳、聞一多ら五名を会規起草委員に選出してゐる。その後、各役職を選出し、

聞一多は書記、梁思成と徐宗溍は事務、浦薛鳳は会計、王繩祖は会所の管理となつた。ミューズ同人の数は少なく、参加した同人は呉沢霖、方来、揚廷宝、董大酉、梁実秋、梁思成、黄自など二十名前後であつたと浦薛鳳は回想している。

ミューズ結成大会は二月一〇日に催された。梁思成の父親梁啓超が出席したこともあり、陳師曾、吳新吾、江少鶴、劉雅農といった著名人が続々と現れその結成を祝つてゐる。この大会は成立大会と称したが、実際は講演会といつたほうがよいものであつた。会上、陳師曾は「中国画は進歩的である」、吳新吾は「フランス絵画小史」、江少鶴は「絵画の評論と作品」、劉雅農は「芸術と個性の關係」と題して講演し、最後に梁啓超が「中国古代審美論」と題して講演している。名論卓説の数々であつたが、各々が強く自説を主張したので氣まずい雰囲気のまま散会となつた。

成立大会の喧騒と比べると、ミューズの活動の方はさほど報道されておらず、『清華周刊』にたつた二つの記事があるだけである。一つは、ミューズ結成翌日に「第一回研究会が催され、研究会の進め方について協議した。音楽、絵画（彫塑、建築を含む）、文学、美学の四部門に分け、週一回研究会をもち、毎回三人、四部門の中から一つを選択し全体協議のために準備する」。もう一つが、翌年一月八日、ミューズ主催による「美術に関して」と題する錢稻孫先生

の講演である。このほかにはいかなる記録もない。ミューズ自体はこの程度のものであるけれども、聞一多がその起草に参与した「ミューズ宣言」はたいへん重要な価値をもつ文献である。

これは聞一多だけではなく故揚廷宝（元世界建築師学会会長）、著名な古代建築専門家梁思成、国内外の文壇で名声を博した梁実秋、著名な作曲家黄自ら世代の学者たちの、青年期の軌跡を理解する上で重要なものであり、さらに五四時代の青年が究極の価値とした「芸術」への理解と「芸術」への献身的な精神、および究極の価値を追求する彼らの努力を表現しているのである。「ミューズ宣言」は次のように宣言している。

私たちは、人類の進化が物質から精神に向かうものであると深く信じている。つまり量から質へである。生命の量が増大したのはたかだかこの百年でしかなく、その質の奥深さ純粋な美しさの発展にはまだ無限の可能性がある。生命の芸術化は、生命が奥深い純粋美の正鵠に達する唯一の方法なのである。

私たちは、社会の生命が衰微しており、その精神が倦み疲れていることを深く信じる。科学の発達がなければ芸術の発達もないのである。だから、私たちが絶対的な生活の満足を要求すれば、芸術の援助がなければならぬと断定するのだ。



私たちは、芸術の研究がずば抜けた精神修養であることを深く信じる。深遠な学理の考究は、つらい技能修練と同様なものである。精神修養と学理の考究は芸術の魂であり、技能修練はその具体的な形である。形があつても、魂がなければ、当然芸術とはなりえない。

私たちはだからこそ自覚する——さまざまな芸術練習の組織の中で、音楽、図画あるいは文学の技能を学習することを熱望することは、けつして芸術研究ではない。そのような研究の芸術は、ただ流行を追うだけであり、退屈しのぎであり、虚飾を飾りたてるのに用いられるだけのものにすぎない。そのような芸術研究は社会の無駄なものであり、生活に害をなすものである。私たちは、これまでの誤謬を自覚した上で、今後は芸術の原理を精神的に分析し、その精神を深く理解して、私たちの技能に正しく発展していくための指針をあたえ、さらに同時に、私たちの生命を純粹で美しく陶冶させていこうと決心したのだ。

正直に言えば、私たちは芸術が私たちの生命を高め、深め、純化して美しくさせうることを信じるし、さらに生命を高め、深め、純化させる術を探し求めそれを実行する。私たち自身の生命で試すのだ。

聞一多らが創造に努めたのは新しい「文化」であり、その創造の中でとりわけ主観的精神が重要視されたことが、

ここにはつきりとあらわれている。この特徴は、新文化運動が清華学生に深い影響をあたえたということを含んでもいるし、さらに学生に近代的な個性を理解させようとする清華学校の教育が結実したということでもある。「ミューズ宣言」を通じて、五四時代における聞一多の、社会革新の意味の受容の有り様、彼の芸術による救国、文化による救国についての認識の有り様がみてとれよう。ここには、いかなる功利的な色彩も、イデオロギーの痕跡もなく、その立脚点は社会的進歩の立場を確立しようというものである。

この時、彼のめざす方向は明確になっており、ただ実践をまつだけであつた。一九二二年夏、聞一多はアメリカへ留学する。他の多くの学生のように正業を選択せず、誰がみても食ひ扶持の見込みなどない西洋美術を選択したのである。この選択は衝動にかられた側面を否認しないにしても、しかし、まさに「ミューズ宣言」中の「私たち自身の生命で試すのだ」という宣言の実践であつた。青年たちについていえば、五四運動は彼らが各自の理想と目標を探り当てる広大な空間を切り開いたのである。後に詩人、学者、闘士となつた聞一多についていえば、五四時代の経験は彼の思想を形づくるために必要不可欠な準備だつたのである。

(一九一九年四月 於東京 初稿)

(一九一九年八月 於北京 定稿)



原注

- (1) 一九一八年一月八日、ウィルソン米大統領が提唱した十四カ条の平和原則。そのなかの植民地問題に関するものとして「公正な立場での判断」、「植民地住民の民意」の尊重などの原則が唱えられ、中国社会の幅広い称賛をうけた。
- (2) 吳沢霖『老友一多二三事』王子光・王康編「聞一多紀念文集」三聯書店、一九八〇年、一六四頁。吳沢霖は清華學校一九二一年組で、聞一多とは九年間共に学んだ。
- (3) 聞一多「提灯会」『清華學報』第四卷第六期、一九一九年五月。
- (4) 聞一多「五四歴史座談」(一九四四年五月三日)『聞一多全集』第二卷、湖北人民出版社、一九九三年、三六六頁。その文中には次のようにある。「五月四日の出来事が清華に伝わった。五月五日早朝、清華學校食堂入り口に岳飛「滿江紅」が貼り出されていた。実は、私が夜の内にこっそり貼っておいたのである。」
- (5) 「清華學生代表團開會記錄」『清華周刊』第一七〇期、一九一九年五月一日。
- (6) 「自治發達史・代表團」『清華周刊本校十周年紀念号』、一九二一年四月二八日。
- (7) 「愛國運動・代表團」『清華周刊本校十周年紀念号』、一九二一年四月二八日。
- (8) 「愛國運動・五月九日之國恥紀念会」『清華周刊本校十周年紀念号』、一九二一年四月二八日。
- (9) 『清華周刊』第一七〇期、一九一九年五月一日。
- (10) 「愛國運動・五月九日之國恥紀念会」『清華周刊本校十周年紀念号』、一九二一年四月二八日。
- (11) 梁実秋『談聞一多』台湾伝記文學出版社、一九六七年、六頁。梁実秋は清華學校一九二三年組、五四運動後は聞一多と密接な関係にあった。
- (12) 傳增湘教育部部長、蔡元培北京大學校長が、北洋軍閥安徽派政府の學生彈圧に不満を抱き辭職したこと。
- (13) 八番目の兄聞亦伝、清華學校一九二二年組。聞一多の家は三代の家族が同居する封建大家族であった。従兄弟をふくめた順序は、聞亦伝は八番目、聞一多は十一番目である。
- (14) 「致父母親」(一九一九年五月一日)『聞一多全集』第一二卷、一七頁。
- (15) 同右、一九頁。
- (16) 聞一多「五四歴史座談」(一九四四年五月三日)『聞一多全集』第二卷、三六七頁。
- (17) 聞一多「清華學生代表團祭徐君日哲文」『清華學報』第四卷第八期、一九一九年七月。
- (18) 聞一多「五四歴史座談」(一九四四年五月三日)『聞一多全集』第二卷、三六六頁。
- (19) 「自治發達史・代表團」『清華周刊本校十周年紀念号』、一九二一年四月二八日。
- (20) 王康「聞一多伝」湖北人民出版社、一九七九年、四八頁。
- (21) 一九四七年三月、生活書店は史靖(王康)「聞一多的道路」を出版した。吳晗は「序」の中で次のように紹介して

いる。「作者は勉強熱心な学生にすぎない。しかし聞一多と同郷であるし、さらに親戚関係もある」。この記述から、王康が聞一多の親戚であることがわかる。だが、王康と聞一多がどのような親戚であったのかについては誰も触れていないので、ここで説明を付しておきたい。聞一多は五人兄弟である。三番目の聞家驥（従兄弟を含めた順序では五番目）は王康の伯母を妻としている。つまり、王康の伯母は聞一多の兄嫁なのである。

〔22〕 聞一多は一九一九年五月一七日付の家族への手紙の中で「新劇社は夏期休暇に上演作品を仕上げるつもりです。これは私の職務なのです」と記している。後の、『清華周刊第五次臨時増刊・新劇社』には次のようである。「来年の国恥記念日に、新劇社は上演活動を予定しており、上演資金を募集しています」。

〔23〕 「致聞家驥」（一九一九年七月二四日）『聞一多全集』第一二巻、二二頁。

〔24〕 三枚の写真はいずれも一九一九年七月二九日付上海『申報』に掲載されている。

〔25〕 「全国学生連合会之閉幕会式」『申報』一九一九年八月六日。

〔26〕 聞一多「五四歴史座談」（一九四四年五月三日）『聞一多全集』第二巻、三六六頁。

〔27〕 「致聞家驥」（一九一九年七月二四日）『聞一多全集』第一二巻、二二頁。

〔28〕 「全国学生評議会紀事」『申報』一九一九年七月三〇日。

〔29〕 『古瓦集』（手稿本）（中国社会科学院文学研究所図書館蔵）。

〔30〕 聞一多談話、際載筆録「八年的回憶与感想」西南連合大学除夕社編『連大八年』一九四六年、七頁。

〔31〕 同右。

〔32〕 吳沢霖「老友一多二三事」『聞一多紀念文集』一六頁。

〔33〕 「儀老日記」『聞一多全集』第二巻、四二二頁。

〔34〕 同右、四二四頁。

〔35〕 同右、四二五頁。

〔36〕 『古瓦集』（手稿本）（中国社会科学院文学研究所図書館蔵）。

〔37〕 「点兵行・序」『聞一多全集』第一巻、二九三頁。

〔38〕 この後、一部の時期と友人との悪ふざげ以外、聞一多は文言による創作をしなかった。

〔39〕 潘光旦。もともとは一九二二年組であった。サッカーで負傷しその傷がもとで落第し一九二二年組となったが、聞一多とは終始密接な関係にあった。

〔40〕 「上社」『清華周刊第六次臨時増刊』、一九二〇年六月。

〔41〕 同右。

〔42〕 『清華周刊』第一八六期、一九二〇年六月。

〔43〕 「上社」『清華周刊本校十周年紀念号』、一九二一年四月二八日。

〔44〕 『清華周刊』第一九二期、一九二〇年一〇月一日。

〔45〕 『清華周刊』第一九六期、一九二〇年一〇月二九日。

〔46〕 『清華周刊』第二〇三期、一九二〇年二月一七日。

- (47) 潘光旦「清華初期的学生生活」『文史資料選輯』第三一輯、中華書局、一九六二年、九二一九三頁。
- (48) 『清華周刊』第一九六期、一九二〇年一月二十九日。
- (49) 果「電影」『清華周刊』第二〇〇期、一九二〇年一月二十六日。
- (50) 錢宗堡「清華園電影問題的我見」『清華周刊』第二〇八期、一九二二年一月二二日。
- (51) 同右。
- (52) 「校長對星期六演電影之意見」『清華周刊』第二〇八期、一九二二年一月二二日。
- (53) 潘光旦「清華初期的学生生活」『文史資料選輯』第三一輯、九三頁。
- (54) 楊廷宝、一九二二年組。後にアメリカに赴き建築を学ぶ。中国建築界には「南楊北梁」という言葉があるが、これは楊廷宝と一九二三年組の梁思成をさしたものである。
- (55) 「美術社」『清華周刊』第六次臨時増刊、一九二〇年六月。『美術社』『清華周刊』本校十周年紀念号、一九二二年四月二十八日。
- (56) 「美術社」『清華周刊』本校十周年紀念号、一九二二年四月二十八日。
- (57) 「建設的美術」『清華學報』第五卷第一期、一九一九年一月。
- (58) 「征求芸術専門の同業者底呼声」『清華周刊』第一九二期、一九二〇年一〇月一日。
- (59) 浦薛鳳、一九二二年組、聞一多とは同級である。梁思

成、一九二三年組、梁啓超の子息である。

(60) ミューズとはギリシア神話で、文芸と科学を司る九人の女神のこと。

(61) 「研究芸術的新団体出現」『清華周刊』第二〇一期、一九二〇年二月三日。

(62) 「美司斯」『清華周刊』本校十周年紀念号、一九二二年四月二十八日。

(63) 浦薛鳳「憶清華級友聞一多」台湾『伝記文学』第三九卷第一期、一九八一年七月。

(64) 「美司斯成立会」『清華周刊』第二〇三期、一九二〇年一月一七日。

(65) 同右。

(66) 「美司斯講演会」『清華周刊』第二〇七期、一九二一年一月一四日。

(67) 「美司斯宣言」『清華周刊』第二〇二期、一九二〇年一月一〇日。

#### 訳注

(1) 猖獗…はげしく暴れまわっているさま。

(2) 升平…平和な世の中。

(3) 豺貔…豺はやまいぬ、欲深い残酷な人をたとえる。貔は猛獣の名、ならして戦争に用いたという。勇猛な軍隊をたとえる。

(4) 齒…腐った肉のこと。

(5) 塗炭…泥で汚いものをたとえる。また、非常な苦

しみをたとえる。

(6) 鴟…ふくろう。その貪欲さから悪鳥とされ、凶悪な人  
にたとえられる。

(7) 塵囂…俗世間。

(8) 淋漓…したたるさま。

(9) 一九一三年、康有為が孔子教の国教化を主張して組織  
した団体。

(10) 呂端(九三三―九九八)、北宋の人。太宗が呂端を宰相  
に任じようとした際、彼を愚鈍と讒言する者がいた。それ  
に対して太宗は、呂端は小事については愚鈍であるが、大  
事については愚鈍ではないと述べた。後に太宗が崩御する  
と、楚王を皇帝に立てようとする者がいる中で皇太子を立  
て、真宗の即位に功を為した。

(11) 僕々…疲れ果てた様をいう。

(12) 停午…正午のこと。

(13) 虞淵…太陽の沈む所、転じて、たそがれ。

(14) 飛廉…風の神。

(15) 檠…燭台。

(16) 長衢…大通り。

(17) 箠…鞭。

(18) 李耳…老子。

(19) 宣尼…孔子。

(邦訳 石田卓生)